

アイヌ語に由来する石狩市内の植物関係地名について

Consideration of place names related to plants in Ishikari City derived from the *Ainu* language

荒山 千恵*

Chie ARAYAMA*

キーワード：地名，由来，アイヌ語，植物，石狩市

1. はじめに

北海道の地名の多くは、アイヌ語が元になっている。その中には、自然との関わりを示唆するものがみられ、アイヌの人々の生活や当時の地形・植生などを知る手がかりとなり貴重である。本稿では、石狩市内の地名から、植物に由来すると推定されるものを取り上げる。

アイヌ語に由来する北海道の地名は、その由来がどのように伝承され、記録や変遷を経てきたかといったことと深く関わっている。児島恭子は、現在、アイヌ語地名と呼ばれている地名の中には、アイヌの人々が代々その名で呼んできたのではないものがたくさん含まれていることを指摘する(児島, 2015)。また、アイヌ語に由来する地名といっても、その成り立ちには、アイヌ語の音を文字に当てたものや、アイヌ語を意識して付けたもの(更科, 1975; 遠藤・小川, 2019など)、さらに、文字に当てたアイヌ語地名にも、江戸時代の古地図や文献に記されたカタカナ表記の地名、明治以降の漢字表記の地名など(東, 2019; 山田^伸, 2019など)、さまざまな変化が認められる。先行研究で指摘されるこれらの点に留意しながら、本稿では、これまでの地名の解釈をもとに、石狩市内にどのような植物に関わりのある地名が認められるのか、現在の地名にはないが記録には残るものも含めて取り上げる。

2. アイヌ語に由来する石狩市内の地名と植物

石狩市内の地名の中に、その由来に植物との関わりが推定されるものが、少なくとも7つ確認された(図1)。参照した主な資料は一覧のとおりである(表1)。また、アイヌ語に由来する植物関連の地名を取り上げるにあたり、更科(1975)、知里(1976)、更科源・更科光(1976)、「角川日本地名大辞典」編集委員会編(1987)、山田(監)・佐々木(編)(1988)、北海道博物館アイヌ民族文化研究センター(2004)他を参照した。

(1) 「志美」^{しび}

石狩川の下流左岸に位置する地名である(図1-1)。アイヌ語に由来する「シシップシ」「シピシウシ」などから、トクサの多く生えるところを意味する(秋葉, 1988: 613; 永田, 1984: 96; 石狩町, 1972: 20; NHK北海道本部, 1975: 55など)。榊原正文は、石狩川本流下流の左岸にある矢白場と右岸の両岸にこの地名が存在したことを指摘する(榊原, 2002: 83-85)。なお、「矢白場」については、『石狩町誌』に「ヤウスバ…矢白場、ヤは網、ウシは場、網引き場であったので、アイヌ語のヤウシバにあてたもの(更科源蔵)」とある(石狩町, 1972: 19)。

* 石狩市教育委員会生涯学習部文化財課(併任, 学芸員) 〒061-3292 北海道石狩市花川北6条1丁目30-2

トクサはシダ植物門トクサ科（学名：*Equisetum hyemale* L.）^{（注1）}（写真1），原野などの湿地に群生する。表面が硬くてザラザラしていることから，乾燥させて研磨に用いられることが知られている。知里真志保は，「トクサ」の「（1）sipsip」（シッシッ）の解説に，「[sipsip（戻り・戻りする）] 茎（北海道全地） 注1.—杓子や箸などの木工品の仕上げをする時、この茎でこすって磨きあげる。その際の手の動きから名づけたものである。」と記している（知里，1976：239）。

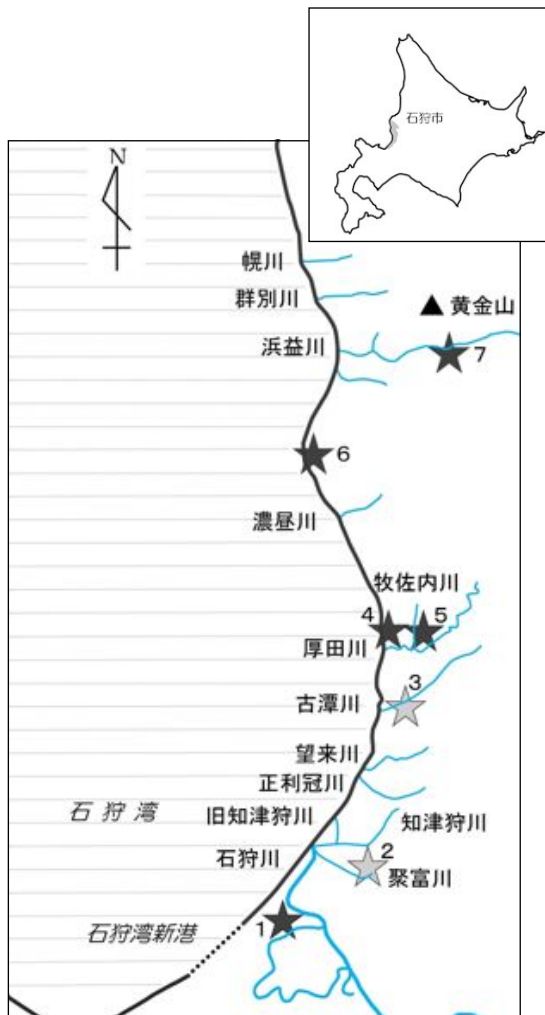


図1. 本稿で取り上げる地名の位置（概要図）。
☆印は文献による記述から推定されるおおよその位置。
1：志美，2：シウキナウシュナイ，3：シキナウシュナイ，4：厚田，5：ボクサナイ，6：送毛，7：プエシ。

(2) 「^{しっぶ}聚富」および「シウキナウシュナイ」

聚富は石狩市厚田区南部にある地名である（図1-2）。この名がついた聚富川は，石狩川河口部に合流する。地名の由来は，アイヌ語に由来する「スオッ」や「シュッ」などから，上流域にみられた箱状の地形を示したものと考えられている（永田，1984：100；榊原，2002：2-3；松浦，1962：205）。山田秀三によると，「川の両岸が立っている地形を倭人も箱といい，アイヌ語の方でもシユオッ（箱）といった」とある（山田，1984：113）。

永田方正は，「シユオッ」および「シウキナウシュナイ」について，次のように記している（永田，1984：100）。

Shuop シユオッ 箱（川）

川上ニ「シウキナウシュナイ」アリ川ノ形状殆ト箱ノ如シ故ニ名ク○聚富村

Shiukina ushu nai シウキナウシュナイ
（箱川筋）^{ヤマウド}山獨活ノ澤

此川状殆ト箱ノ如シ故ニ一名「シユオッ」ト云フ

「シウキナウシュナイ」（下線は筆者による，以下同様）は，現在の地図には見られない地名で，永田方正の記述から，聚富川上流域にかかわるものとみられる。また，松浦武二郎の「東西蝦夷山川地図取調図 十」（1860年跋）には，「シュツフ」の近くに「シユウキナウシトウ」の記載がある（松浦，1988）。永田が「^{ヤマウド}山獨活」とした「シウキナ」については，アイヌ語の「シウ」（がい）・「キナ」（草）の意から，エゾニュウのこととして知られている（知里，1976：59-60；榊原，2002：3）。榊原は，「シウキナウシュナイ」の項の中で，「スオッ」がこの河川の地形的特徴を描写したものであるのに対し，この地名は「シウキナウシュナイ」はその地域で採集される食料を記載したものと指摘する（榊原，2002：4）。「シウキナウシュナイ」は，聚富川上流域にエゾニュウが群生していたことを示すものと考えられる。

エゾニュウ（学名：*Angelica ursina* (Rupr.)

Maxim.) (写真2) はセリ科の多年草で、現在の聚富地区では海岸から内陸側に広がる草地に自生しているのが見られる。背丈が2mを越えるものもあり、8～9月上旬頃に花を咲かせる。エゾニユウの食用利用について、知里は「エゾニユウ」の解説の中で、「これを取って来たら、先ず皮を剥いて味を見て、比較的にかくないのを選んで生で食べた。魚油を付けて食うと苦くないとも云っていた。苦いのお水にひたしておいて汁の実にして食べた。〈後略〉(幌別、白老)」と記している(知里, 1976: 59-60)。

なお、「聚富」についての他の見解として、アイヌ語「チュチュプ・ウシ」で「木賊が多いという地名から出たかと思われる」との指摘もある(NHK北海道本部, 1975: 65)。

(3) 「シキナウシュナイ」

厚田区古潭の川筋にある名称として、永田は「シキナウシュナイ」について、次のとおり記している(永田, 1984: 101) (図1-5)。

Shikina ush nai シキナウシュナイ (コタン
ウン ペト 川筋) 蒲澤

ガマ(学名: *Typha latifolia* L.) はガマ科の多年草で、水辺に自生する(写真3)。アイヌ文化では、この草を材料に蓆を編む。知里は、「ガマ」の「(1) si-kina」(シ・キナ)の解説に、「[真の・草] 荃葉(北海道全地) 注1.—この場合kinaはごぎを編む草をさす。ごぎを編む草いろいろあるが、その中でガマが最も喜ばれるのでこの名があるのだとゆう。」と記している(知里, 1976: 232)。

(4) 「^{あつた}厚田」

厚田は厚田区の中央部に位置する(図1-3)。市街地には厚田川が流れ日本海に注ぐ。山田秀三は、「厚田村」の地名について、「石狩川口から濃昼川までの土地が厚田郡であり厚田村である。この村内の地名はどういうわけか原名であるアイヌ語の意味が特に分からなくなっているのであつ

た。厚田の語義もその一つである。」と指摘する(山田, 1984: 113)。ここでは、主に3つの説について取り上げる。

アイヌ語「アツ」から、オヒョウの樹皮および内皮から採った繊維に由来する説がある。上原熊次郎の『蝦夷地名考並里程記』では、次のように記している。

アツタ

夷語アツタとは則あつし皮を剥くと譯す 扱
アツとは夷人着用になすあつし皮の事 ター
とは取る亦は作るなどの訓にて夷人共山中に
往きてあつし皮を剥く故此名ありという〈後
略〉

(上原, 1824/東京国立博物館デジタルライ
ブラリー画像番号: DIGITAL-L0211554)

また、松浦武四郎の『西蝦夷日誌』では、次のように記している。

アツタ、譯して楡皮取という儀にて、此川^{これの}楡
皮多きが故に号し也。今其川の名をアル川に
^{かわ}当て、彼をアツタベツとするは誤りなり。アルは彼川にして、其名儀次に記す如し。昔し此運上やアツタに有りしが故、場所の惣名となせども、今の運上屋の地は本名をヲシヨロコツ〔押琴〕と云処なり。(松浦, 1962: 204-205)

アツタ(川幅十四五間、舟わたし)前に云如く、此川はアルにして、アツタは場所の惣名なり。アル、譯して白芷(アル: シャク)が至て宜しと云儀。此草シユウキナとも云、所々にて名異なる也。アツタの地は少し先なる處にて、昔しはアツウルシナイといふなり。(松浦, 1962: 208)

さらに、「アツウルシナイ」には、厚田の地名の起源として、次のように記している。

アツウルシナイ(小澤、上に沼あり)、土人等昔より楡皮をひたし、置故に号く。土人の言にアツタの名此處に始まると。(松浦, 1962: 209)

オヒョウ（別名：オヒョウニレ，学名：*Ulmus laciniata* (Trautv.) Mayr ex Schwapp.）はニレ科の高木で，主に山地にみられる（写真4）．知里は，「オヒョウ／オヒョウニレ」に，「（1）at「あッ」樹皮、及びその内皮から取った繊維（全北海道） 注1.—紐をatと云う。この樹皮を裂いて紐に使ったからそれでこれをatとゆうのであろう。」と記している（知里，1976：165）．アイヌ民族の衣装を作る織物「アットウシ」の名称も，この木に由来するといわれている．かつて厚田村では，オヒョウの内皮の繊維をニシン漁などに使用する木造船の浸水（アカ）止めにも用いた（写真5）．

オヒョウの樹皮とする見解とは異なる説として，永田はイモリを起源とする解釈を示している．

—Ara pet アーラ ペツ

イモリ 蜥蜴川 此川筋ニ蜥蜴多シ故ニ名ク、蜥蜴ヲ「ハラム」又「アーラ「ト云フ」アーラ」ハ「アラム」ノ短縮語ナリ古言ノ「ア」ハ中古ヨリ多く「ハ」ニ轉ス故ニ「蕁麻」ヲ「アイ」ト云ヒ「ハイ」ト云フガ如シ○今厚田（村、川）ト云フ厚田ト云フハ場所ヲ置キタルトキノ名ナリ楡皮ヲ取ルノ意ニアラズ（永田，1984：102）

さらに，上記とは異なる見解がある．榊原は，「アッタウシ」の参考に，ニシンの群来とする解釈を試案している．

後志支庁管内海岸部の調査では，“アッ at”という語彙は「（ニシンの）群来」を表わしていることが多かった．（中略）仮にこの地名が海岸部を指す名称であったとするなら，「厚田」は紛れもなく「群来」を起源としていると考えても良いように思われ，試案として次のような解釈も掲げておきたい．“アッタウシ at-ta-us-i”（（ニシンの）群来・取る・よくした・もの（海岸））．（榊原，2002：18）

（5）「ボクサナイ」

厚田川に右岸から合流する牧佐内川をやや上った辺りに「ボクサナイ」の地名がある（注2）（図1-4）．アイヌ語に由来する「プクサウシナイ」から，ギョウジャニンニクの多い沢の意とされる（NHK北海道本部編，1975：63,65など）．「プクサ」は，アイヌ語でギョウジャニンニクの茎葉のことである（知里，1976：195）．榊原は，「プクサウシナイ」を「ギョウジャニンニク・取る・よくした・川」と解する（榊原，2002：51）．松浦の『西蝦夷日誌』には，厚田川の川筋のこととして，「此澤五六町にして兩岸広し、フクシヤタウシ 茗葱取多（右）、〈後略〉」とある（松浦，1962：208）．また，永田は，「プクサウシユナイ 蕪川」としている（永田，1984：102）．

ギョウジャニンニク（学名：*Allium victorialis* L. subsp. *platyphyllum* Hultén）（写真6）はヒガンバナ科の多年草で，山地の林内や草地に生育する．若芽は山菜として食用にされる．また，知里による「ギョウジャニンニク」の解説には，食用以外の利用として，「この植物わ、猛烈な臭気を有するので，病魔が近ずかぬとアイヌわ信じて、伝染病流行の際わ、家の戸口や窓口に吊したり、枕の中に詰めたりした他に、ほとんど凡ゆる病気に用いた。」とある（知里，1976：195）．

（6）「送毛」

浜益区南部にある地名である（図1-6）．松浦の『西蝦夷日誌』には，次のように記されている．

ヲクリケ（砂濱）、名義ヲクリキナといへる草有るより号ると。此所少しの湿地あり。ヲクリキナは恐らくは谷地草やちぐまかと思はる。紫萼の種にて、日光にてウルイと云、東地には多き物也。（松浦，1962：214）

「紫萼」はギボウシのことで，「ウルイ」は春の山菜として利用されるギボウシ属の呼名である．アイヌ語で「ウクルキナ」はタチギボウシ（注3）

のことで、知里は「ukur-kina」をタチギボウシの葉としている。また、「葉柄をよく洗って、細かく切り刻んで飯やかゆに炊き込んで食べ、また刻んだのを干して冬のために貯えておいた（幌別、白浦）」とある（知里, 1976: 205-206）。

タチギボウシ（学名：*Hosta sieboldii* (Paxton) J.W.Ingram var. *rectifolia* (Nakai) H.Hara）（写真7）は、クサスギカズラ科の多年草で、湿地に生息し、7月から8月頃に開花する。

一方、永田は次のように記している。

Ukuruki Syn Tokina ウクルキ 一名 トーキナ
サジオモダカ
 澤瀉 和名サジオモダカ、日光山ノ方言ウルイ、ト云其白莖ヲ食フ和人「オクリケ」ト云フハ訛ナリ（永田, 1984: 104）

サジオモダカ（学名：*Alisma plantago-aquatica* L. var. *orientale* Sam.）は、オモダカ科の多年草で、湖沼やため池などの湿地の水辺に生育する。永田は「サジオモダカ」と記しているが、その説明には「方言ウルイ」や「白莖を食フ」とあり、内容的には「タチギボウシ」とみるほうが合致するように考えられる。

(7) 「プエシ」

浜益区実田を流れる浜益川の中流左岸から入る支流の位置に、「プエシ」の地名があった（図1-7）。現在の地図には「プエシ」の記載は見られないが、1893（明治26）年初版の「二十萬分ノ一北海道実測地図」（図名「増毛」）や、1897（明治30）年発行の5万分の1地形図（図名「茂生」, 陸地測量部）に記載がある。また、松浦の『西蝦夷日誌』や永田の『北海道蝦夷語地名解』では、当該地域の記載に「プエシ」は見られない。榊原によると、「プエシ」の記載のある支流は、「エタンケ川」と呼ばれる小河川に該当する。また、榊原は「プエシ<プイウシ (puy-us-i)」から「エゾノリュウキンカの塊根・群在する・もの（川）」と解している（榊原, 2002: 61）。知里は、「プイ」(puy) をエゾノリュウキンカの根としており、根を食用や薬用に用いたこ

とを記している（知里, 1976: 149-150）。

エゾノリュウキンカ（学名：*Caltha fistulosa* Schipcz.）（写真8）はキンポウゲ科の多年草で、別名ヤチブキともいう。沢沿いや湿地に生育し、開花時期は5月から7月頃とされる。なお、写真8のエゾノリュウキンカは「プエシ」と示された場所ではないが、浜益川水系に伴う地域で撮影したものである。

3. おわりに

本稿では、植物にかかわる石狩市内の7つの地名について、現在の地図には掲載のない地名を含めて紹介した。本稿で用いた古地図・文献等については表1に示したとおりであるが、これらは網羅的ではなく、さらに多くの資料に当たることによって、地名の由来や当時の自然環境についてより具体的な解明に繋がるものとする。今後の課題としたい。

地名の起源と推定される主な植物には、食利用との関わりが考えられるエゾニュウ・ギョウジャニンニク・タチギボウシ・エゾノリュウキンカが確認された。これらの中には、アイヌ文化で薬用や信仰に関わるものとして知られるものも含まれる。また、生活用具や衣類などの素材になるオヒョウの樹皮繊維・ガマの莖葉、生活用具で木製品などの研磨に用いられるトクサが確認された。

地名に該当する現地へいくつか訪れたが、草木に覆われて確認の難しいところや、明治以降の開発や整備によって土地が改変されているところなど、状況の確認は容易ではない。場所によっては、既に由来となった植物が地名の場所に生育していない可能性もあるが、今回訪れることのできなかった場所もあるため、さらに地名と現地周辺について見ていきたい。なお、現在、これら7種の植物は、いずれも石狩市内には自生している。今後も、自然と人々との関わりや植物利用について探究していきたい。

謝辞：本稿執筆にあたり、厚田区地域おこし協力隊の江崎勇人氏、石狩市学芸協力員の石橋孝夫氏より画像提供をいただきました。末筆ながら心より感謝申し上げます。

注1 本稿に記す植物の学名については、YList（米倉・梶田，2003-）を参照した。科名については、YListを参照のもとAPG体系により記した。植物の特徴（生育環境、開花時期、植物利用など）については、主に、図鑑・辞典（佐藤，2001，梅沢，2007，知里，1976）やアイヌ民族博物館（ホームページ「アイヌと自然 デジタル図鑑」）を参照した。

注2 国土地理院が作成している2万5千分の1地形図では、2003年発行のものは「ボクサナイ」および「牧佐内川」のいずれも掲載されている。2009年発行のものは「牧佐内川」の表記はあるが、「ボクサナイ」の地名は掲載されていない。

注3 梅沢は、「コバギボウシ」の解説に、「北海道のものは葉が大きく、花の細い筒部が短い変種タチギボウシと見分ける見解もある」としている（梅沢，2007：338）。

引用文献

- アイヌ民族博物館ホームページ。アイヌと自然 デジタル図鑑。http://www.ainu-museum.or.jp/siror/（2020年12月現在）。
- 秋葉実解説，1988。石狩・テシホ・クスリ外十二所川々取調帳。武四郎蝦夷地紀行。（松浦武四郎没後100年記念出版。）北海道出版企画センター。（石狩：安政4（1857）年。）
- 東俊佑，2019。江戸時代の古地図・古文書とアイヌ語地名。北海道博物館編 北海道博物館第5回特別展「アイヌ語地名と北海道」図録，56-57。一般財団法人北海道歴史文化財団。
- 知里真志保，1976。知里真志保著作集 別巻I。分類アイヌ語辞典植物編・動物編 平凡社。（『分類アイヌ語辞典 第一巻 植物篇』1953および『分類アイヌ語辞典 第二巻 動物篇（遺稿）』1962の覆刻。）
- 遠藤志保・小川正人，2019。アイヌ語地名とは何か？。北海道博物館編 北海道博物館第5回特別展「アイヌ語地名と北海道」図録，6-8。一般財団法人北海道歴史文化財団。
- 北海道庁アイヌ政策推進局アイヌ政策課ホームページ。アイヌ語地名リスト。http://www.pref.hokkaido.lg.jp/ks/ass/new_timeilist.htm（最終更新日2018年4月4日）。
- 北海道庁編纂，1893。増毛。二十萬分ノ一北海道実測地図。
- 北海道博物館アイヌ民族文化研究センター，2004。アイヌ文化紹介小冊子 地名。9。
- 石橋源，1980。浜益村史。浜益郡浜益村役場。
- 「角川日本地名大辞典」編集委員会編，1987。角川日本地名大辞典。1 北海道 上巻。角川書店。
- 石狩町，1972。石狩町誌。石狩町。
- 児島恭子，2015。アイヌ語と地名（1）アイヌ語地名の始まり。地名と風土，8：108-113。
- 松浦武四郎（山田秀三監修），1988。別冊 東西蝦夷山川地理取調図（原典：1860跋）。アイヌ語地名資料集成。草風館。
- 松浦武四郎（吉田常吉編），1962。蝦夷日誌 下。時事通信社。（原典：西蝦夷日誌1863序-1872跋）。
- 永田方正，1984。初版 北海道蝦夷語地名解 復刻版。草風館。（初版：1891）。
- NHK北海道本部編，1975。北海道地名誌。北海教育評論社。
- 陸地測量部，1897。茂生。5万分の1地形図。（国土地理院リスト番号：45-11-6）。
- 榊原文正，2002。データベース アイヌ語地名2。石狩-I。北海道出版企画センター。
- 佐藤孝夫，2001。増補新版 北海道樹木図鑑。亜細亜社。
- 更科源蔵，1966。アイヌ語地名解-北海道地名の起源-I。北書房。
- 更科源蔵，1975。解説 北海道の地名。NHK北海道本部編 北海道地名誌。北海道教育評論社。
- 更科源蔵・更科光，1976。更科コタン生物記I 樹木・雑草篇。法政大学出版局。
- 上原熊次郎，1824。蝦夷地名考並里程記。（写）。東京国立博物館デジタルライブラリー。（資料番号：QA-601）。
- 梅沢俊，2007。新北海道の花。北海道大学出版会。
- 山田伸一，2019。アイヌ語地名の漢字表記の近現代。北海道博物館編 北海道博物館第5回特別展「アイヌ語地名と北海道」図録，88-90。一般財団法人北海道歴史文化財団。
- 山田秀三，1984。北海道の地名。北海道新聞社。

山田秀三監修・佐々木利和編, 1988. アイヌ語地名資料集成. (別冊・東西蝦夷山川地理取調図 付) 草風館.

米倉浩司・梶田忠, 2003-. BGPlant和名-学名インデックス (YList). <http://ylist.info> (2020年12月).

表1. 本稿で地名の由来を確認するために用いた資料.

地名	資料名					その他
	①西蝦夷日誌 ②石狩・テシホ・クスリ外十二所川々取調帳 ③東西蝦夷山川地理取調図 (松浦武四郎)	北海道蝦夷語地名解 (永田,1891)	北海道地名誌 (NHK,1975)	北海道の地名 (山田,1984)	データベースアイヌ語地名 (榊原,2002)	
志美	②③	◎	◎	-	○※1	石狩町誌 (石狩町,1972) 角川日本地名大辞典 (編委,1987)
聚富 シウキナウシュナイ★	①③★	◎★	◎	◎	◎★	角川日本地名大辞典 (編委,1987)
シキナウシュナイ	-	◎	-	-	-	-
厚田	①③	◎	◎	◎	◎	蝦夷地名考並里程記 (上原,1824) 角川日本地名大辞典 (編委,1987) アイヌ語地名リスト (北海道,2018)
ボクサナイ	①③	◎	◎	○※2	◎	-
送毛	①③	◎	○※3	◎	◎	浜益村史 (1980) 角川日本地名大辞典 (編委,1987) アイヌ語地名リスト (北海道,2018)
フエシ	-	-	-	-	◎	二十萬分ノ一「増毛」 (北海道庁,1893) 5万分の1「茂生」 (陸地測部,1897)

【凡例】

◎：地名が項目に挙げられ解説されているもの

★：「シウキナウシュナイ」に関わる記載のみられるもの

○：地名が項目に挙げられていないが、河川名や備考・図などに地名にかかわる情報がみられるもの

※1：「シツプシ」(石狩川本流下流部左岸)の解説文の備考に「志美」について記載があり、「下略・音訳したものと推定される」(榊原, 2002: 84)としている。

※2：「石狩地方の日本海沿岸図」(山田, 1984: 114)の中に「牧佐内」は示されているが、地名解説の記載はない。

※3：「送毛」の記載はないが、「送毛川」による記載はある。



写真1. トクサ (聚富, 2020年9月上旬採集・撮影) .



写真2. エゾニュウ (聚富, 2020年9月上旬撮影) .



写真3. ガマ (石狩市親船町, 2020年9月上旬, 石橋孝夫氏撮影) .



写真4. オヒョウ (石狩市濃屋, 2019年5月, 江崎勇人氏撮影) .



写真5. オヒョウの繊維を用いた船のアカ止め (籠の中). (道の駅(厚田)の展示, 2020年, 石橋孝夫氏撮影).



写真6. ギョウジャニンニク (濃屋, 2020年4月, 江崎勇人氏撮影) .



写真7. タチギボウシ (石狩川河口地域, 2020年7月中旬, 石橋孝夫氏撮影) .



写真8. エゾノリュウキンカ (浜益区, 2019年5月中旬) .